

# そらこめ通信 No.33 2013.04発行

日頃より弊社の米をお買い上げ頂き誠にありがとうございます。心よりお礼を申し上げます。  
 冬の間に我々が取り組む作業として、プラントでの精米、配送作業のほか、農場においては越冬させたハウスの「保守」を目的とした除雪、もみ殻を使った活性炭の製造などを主に行っているわけですが、3月に入ると農場での作業内容や目的が大きく変わります。ここからの作業は全て新しい年の作付けに向かうための準備、いや、希望に満ちた出来秋を迎えるための本格的な農作業の始まり…と言った方が適切なのかも知れません。

どの圃場にどの品種をどれだけ植えるか、昨年末に実施した土壌検査の結果を受けてどの肥料をどれだけ使うか、融雪後にどの圃場をどれだけ補修するか、機械の整備は万全か等々…。頭の中で色々考えをまとめつつ、大型の重機を使いながらの育苗ハウスの除雪や人力による育苗ハウスの組み立て作業、融雪剤の散布など、限られた期間の中でこなさなければいけない作業が山ほどあるわけです。

改めて考えると農業という商売は、緻密な作業計画を立てた上で、それらを着実に実行に移す忍耐力というが精神力みたいなものが他の商売に比べてより多く必要な商売だと思います。しかも、自然と向き合いながら…。毎年同じことの繰り返しのように見えて、実は毎年違う。

木村社長が言っていました。「自分だって、まだ三十数回しか収穫した経験がない」と…。二毛作が可能な地域ならいざ知らず、ここでは作物を収穫できるのは1年に1回だけ。その分、その1回にかける「期待」や「想い」はものすごく大きいでしょうね。

3月31日現在、弊社圃場の積雪深は170cmありました。沼田町のホームページの値も3月21日の時点で171cmとほぼ同じ。この数値は比較的雪が多かった昨年よりさらに十数センチ多い値です。4月中旬を過ぎると、それぞれの農家は各自の圃場における融雪の進み具合に神経をとがらせます。それは、(稲の)種を撒き始める日を決めなければならないから。播種が終わればハウスの中で苗が育ちます。ハウスの苗は育ちすぎてもダメ。最適な生育状態で圃場に移植しなければ健全な稲になりません。その為に圃場における融雪の時期を予測し、田起こしの期間も加味したうえで、そこから逆算して播種を始める日を決めるのです。

自然を読むなんてことは人知を超えた技ですが、過去の経験がそれを可能にしてくれるのでしょう。誰彼に簡単に真似ができない商売。こんなところにも農業の面白さ、すごさがあります。



小型機械で除雪する木村社長(3月2日)



スコップでの雪割り(3月4日)



地鎮祭(3月10日)



地鎮祭で参拝する地域の人たち(左)と玉串を捧げる木村社長(中)(3月10日)



地鎮祭での懇親会の様子

東北地方を襲った未曾有の大震災から3月11日です。2年前のあの日、テレビの画面から流れる津波の映像を見て、これが果たして現実なのかどうか判断できず、ただぼんやりと画面を眺めていた記憶があります。震災翌日の3月12日は地元的地鎮祭の日。例年通り行事が執り行われたことに当時はある種の違和感を感じました。でも、それも今はひとつの答えの出し方なのだと思っています。自然相手の商売。何があっても粛々と物事を進める感覚が時には必要かも知れません。



大型機械を使つての除雪(3月11日)



ハウスの組み立て作業(3月12日)



ハウスの除雪作業(3月15日)



ハウスの組み立て作業(3月15日)



融雪剤としてケイ酸資材の「ケイカル」を散布(3月19日)



圃場での融雪剤の散布(3月19日)



育苗ハウスにビニールテントをかける作業(3月25日)



完成した育苗ハウス(3月25日)



播種の準備作業(3月29日)



圃場の積雪深は170cmです(3月31日)

弊社では、毎年収穫後の土を採取して圃場ごとに土壌検査を行っています。その結果、弊社の圃場ではケイ酸を含む資材を多めに使うことが重要と判断するなど施肥の参考にしています。ケイ酸は夏の温度が高いほど稲に吸収されるもの。健康な稲の生育と食味の向上に欠かせない要素です。お金がかかっても、土壌検査はその土地の特質を知るうえで重要なのです。

これからも安全で美味しいお米の生産に努めますので、引き続きご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。

インターネットで美味しいお米!

(株)空知こめ工房 ホームページ  
<http://www.sorachi-kome.jp/>  
 ブログ「生産日誌」更新中です